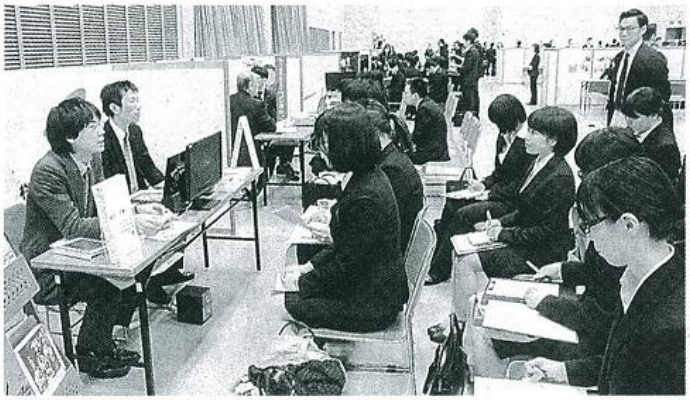
H27 年 3 月　新聞記事（山陰中央新報）

採用担当者の話を聞き、メモを取る学生（右）＝松江市学園南1丁目、くにびきメッセ



短期決戦就活 懸命PR

最多144社・団体 松江で合同説明会

来春に卒業する大学生らの採用、就職活動の解禁を受け、ふるさと島根定住財団などが8日、松江市内で合同企業説明会「しまね企業ガイダンス」を開いた。深刻化する人手不足を反映し、山陰両県から過去最多の144社・団体が参加。学生も約660人が来場し、経団連の日程ルールの変更で「短期決戦」となる中、双方が「意中」の人材、就職先を見つけようと臨んだ。

会社説明会の解禁は従来、大学3年生の12月だったが、3カ月遅れの3月1日に変更。面接など選考活動も4カ月繰り下げられ、4年生の8月1日に始まる半面、採用内定のスタートは10月1日のままとなった。

この日は3月1日の解禁後、初めての説明会となる企業・団体が少なくなく、各ブースでは、採用担当者がタブレット端末や自社の製品を使い、業務内容や魅力を懸命にPRした。

全国的に技術者が不足し、獲得競争が激しさを増す業界の一つが、IT業界。松江市に昨年、事業所を開設し、15人の新卒者の採用を予定するシステム開発のヒューマンシステム（東京都港区）の湯野川恵美社長は「説明会を機に会社を知ってもらい、見学会の参加につなげていきたい」と言葉に力を込めた。

一方、学生も熱心にメモを取りながら、職場の雰囲気や仕事のやりがいなどを質問。米子市出身で地元就職を志す島根県立大学の大西葵さん(20)は「魅力的な企業に多く出会え、視野が広がった」と話した。

平成 27 年 3 月 9 日付け・山陰中央新報

県立大松江四年制化を

短大課程 全3学科 有識者懇が報告書

島根県内で唯一、短期大学課程を持つ県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）の在り方を議論する県の有識者懇談会（座長・古瀬誠県商工会議所連合会会頭、20人）は11日、松江市内で会合を開き、保育、総合文化、健康栄養の短大課程全3学科を四年制化すべきとする報告書をまとめた。県は報告書を基に、2015年度の早い段階で方針を決める。

報告書では健康栄養学科について、看護学部のある出雲キャンパス（出雲市西林木町）への移転も提言。医療現場での連携が求められる看護を学ぶ学生との共同演習や講義が可能な体制づくりを求めた。

四年制化に伴い、県内で義務拠点のない国家資格・管理栄養士の資格取得が目指せるほか、高度な知識を持った保育士の養成が見込まれるといった利点を挙げた。

一方、四年制化に向けた課題で、県内の優秀な人材を確保する「地元枠」入試の設定や、短大と比べ割高になる授業料など経済的負担を支える奨学金制度の拡充など7項目を示した。

四年制化した場合、島根県は全国で唯一の短大空白県になる。報告書では短大への進学を希望する高校生のニーズが依然あると指摘。課題の一つに「短大の一部を残すことができるか検討する必要がある」とした。

会合に同席した溝口善兵衛知事は「新年度のできるだけ早いうちに方針を決定したい」と述べた。県立大の本田雄一学長は「課題をし、より良い結論につなげ大学としても自主的に検討たい」と話した。

平成 27 年 3 月 12 日付け・山陰中央新報

県立大のマイスター制度

地域課題の理解深める

「共生学入門」概要発表

県立大学はこのほど、独自の学生認定の仕組みとして創設する「しまね地域マイスター」制度で、1年生の必修科目として2015年度に総合政策学部（浜田キャンパス）で開講する「しまね地域共生学入門」の概要を発表した。出雲、松江を含む3キャンパスの教員らが交代で全15回、県が直面する課題について講義する。

同制度は、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」で採択された同大の事業の一環で、4年制の総合政策学部と看護学部（出雲キャンパス）で導入。4年間のカリキュラムに基づき、県内の事情に精通し、課題解決に取り組む実践力を付けた学生を「しまね地域マイスター」として認定する。

しまね地域共生学入門は、同カリキュラムの「基礎科目」の位置付け。人口減少や少子高齢化といった課題を再認識し、対応への理解を深めることを目的とする。

4月8日の初回は本田雄一学長自ら、科目の意義について講義する。2回目以降は各教員が専門分野から課題を解説。県政策企画監室の職員や山内道雄海士町長も講師を務める。

看護学部では16年度に開講。マイスター制度を導入しない短期大学部（松江キャンパス）でも、同年度から必修科目として実施する。

平成 27 年 3 月 18 日付け・山陰中央新報

持続可能な共生社会実現を

文部科学省 地(知)の拠点

地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム事業 第2回全域フォーラム

島根県内で取り組む研究の発表

文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択された島根県立大学の「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム事業」について、大学側が成果報告する「第2回全域フォーラム」が2月17日、浜田市野原町の同大浜田キャンパスで開催された。事業採択は2013年度で、フォーラムでは4年目となる14年度の取り組みを中心に報告、基調講演に続き、浜田、出雲、松江各キャンパスの教員が島根県内で取り組む課題解決や活性化のための研究を説明した。連携協力協定を結ぶ浜田、益田両市との共同研究の発表もあった。詳細を紹介する。

基調講演でまちづくりについて話す東京農業大学の木村俊昭教授

東京農業大学教授
木村俊昭氏

基調講演 地域が元気になるには ～地域連携の処方箋～

私は北海道オホーツク地域の出身。高校時から、地方公務員になって、知り気づきの場を創りまちを元気にしたいと考えていた。

大学時に地域の現場で、大切なのは三産業・歴史・文化を徹底的に掘り起こし、研き、世界発信することも目指している。

・医療機関が少ないという問題も迎えている。

これらに対応するため、休耕地を活用した農作業体験や住民との交流会などを実施。作業の前日には公民館で交流会を開催し、住民と親睦を深めた。また、夏祭りやトンド焼きといった地域の伝統行事にも企画で、地域を元気にしようとしている。同時に住民の「教育力」を活用し、学生を地域志向の看護職に育て

休耕地も拡大。近くに保健

・1人年度は無償で借りた水田で、住民の指導で農作業意識も高まった。今後は地

これらに対応するため、

民館で交流会を開催し、住

夏祭りやトンド焼きといった地域の伝統行事にも企画で、地域を元気にしようとしている。同時に住民の「教育力」を活用し、学生を地域志向の看護職に育て

生涯目標にした。

小樽市職員として、この三つの目標を実践するため、本業は住事業、時には配属とは関係なく、休日を活かし市内の飲食店や歴史的建造物を重点的に調査・分析した。まちづくりのテーマに「商店街再生」が取り上げられることも多いが、中小企業庁のアンケート調査では、「繁栄していると人生と考え、時には配属とは関る」「繁栄の兆しがある」との回答はわずか3・3%。現場の実態

私が地域活性化に取り入れているのは「五感六育(感育・食育・木育・遊育・知育・健育・職育)」の0～100歳のコミュニケーション、コミュニティーの形成だ。こうした事例も参考にして、自分たちのまちはどんな魅力があるか、子どもたちはじめ、地域の皆さんと共に確認し、事業構想と実現をしたい。

基調講演 まちの魅力確認しよう

「高津川と人々の暮らしの繋がりから探る地域の魅力」

寺田哲志准教授(浜田キャンパス)

研究対象は高津川。国土交通省の水質ランキングで近年6回も「日本一」となっており、地域の魅力の源

川への愛着 地名に発見

高津川を愛する人が大勢いることが分かった。特徴的なのは、話の中に地域に根付いた冗談が交じることに。今後、高津川の魅力を訴えていくのなら、まず行きの郡会風のアイデアではなく、石見の人の面白みを伝えるような形がいいのではないか。今後の取り組みに生かしたい。

寺田哲志准教授

「農医連携による限界集落の活性化に関する試み」

松本亥智江准教授(出雲キャンパス)

出雲市佐田町の吉賀集落。同集落は人口約70人で、高齢化率は41・9%(2014年)。担い手不足で伝統行事の維持が難しくなり、

学生と住民 行事で交流

ムで結び、教員らが住民に健康指導を行った。

学生は自分が生まれた土地への思いを新たにしたようで、食を通じた健康への関心が高まった。今後は地

松本亥智江准教授

「児童文化財の現状をふまえた保育者養成プログラムの展開」

福井一尊准教授(松江キャンパス)

「児童文化財」とは子どもが出会う絵本や紙芝居、手遊び、歌、おもちゃなど「童文化」という授業科目があり、その根幹の教育プロ

保育現場を調査、充実へ

みたいで保育現場へのアンケート調査も行った。

松江市の島根県民会館ホールで開催する「ほいくまつり」には保育学科1、2年の全学生100人が参加。発表内容や舞台など全て学生の手作りで、全過程を子どもの視点で考える。

また、毎年6月に開催される保育所・幼稚園を対象に児童文化財に関するアンケート調査を行い、分析した。

一例として、保育者がない時間に保育の面白さを実は保育の仕事に向かう意欲が一定数あった。こうした結果を反映させながら、育現場でどんな児童文化財に触れているのか、直接知

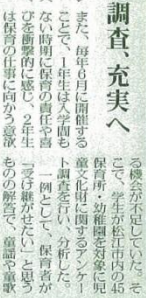
福井一尊准教授

「ヘルスツーリズムによる地域活性化の可能性」

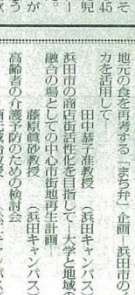
小村智子助手、**山下一也副学長**(出雲キャンパス)

島根県川本町ではこれまで、住民に参加してもらい、町産のエゴマ油を使った地中海料理による認知症予防を研究してきた。取り組の結果から認知機能の向上が確認されており、動脈硬化の予防などにも効果があると考えている。

一方、川本町は観光資源に乏しい。そこでエゴマ油や豊富な自然資源を活用した「ヘルスツーリズム」のモニターツアーを企画した。参加者は出雲市十六島町の



小村智子助手



山下一也副学長

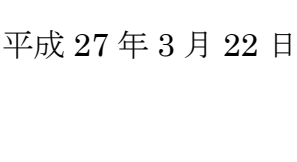
健康テーマの観光模索

北浜地区の20、60代の男女16人。バスを使った日帰りで、川本町内でのウオーキングやエゴマ油を使った地中海料理の昼食、健康に関する講話、道の駅での買い物、温泉入浴を盛り込んだ内容とした。

アンケートで感想をまとめたところ、肯定的な評価がほとんど。全員が、川本町で本格的なツアーが始まると答えた。

この結果から、観光資源に乏しい県西部の中山間地域において、健康と自然資源を合わせたヘルスツーリズムは、新たな観光資域としての可能性を持つと言えるのではないか。川本町には「エゴマヘルスツーリズム」として提案したい。

縁結びプラットフォーム事業とは



文部科学省が実施する、地域を志向し、地域の再生・活性化に貢献する大学を支援する「地(知)の拠点整備事業」に、島根県立大学は「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結び」プラットフォーム事業に採択され、事業を進めている。

縁結びプラットフォーム事業では、地域ニーズ(要望)と大学シーズ(資産)のマッチング(=縁結び)を図る場である「縁結びプラットフォーム」を構築し、地域とともに将来を担う人材を共育し、住みよい地域を共創し、持続可能な共生社会の実現を目指す。

浜田・出雲・松江キャンパスの専門性と総合力を生かし、全域プラットフォーム、地元自治体や企業・団体、NPOなどと協働し、地域に開かれた大学として地域社会へ貢献する。

あいさつ

島根県立大学理事長
本田雄一氏

開会のあいさつをする本田雄一理事長

地域で学び人材育成

島根県立大学は大学憲章の前文で、地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すと明らかに

にしており、この理念は「地(知)の拠点整備事業」の趣旨と合致している。採択から2年目となり、事業を本格

に推進する時期に入っている。

まね地域共生センター」、出雲は「まね看護交流センター」を中心に、実践力のある専門人材の養成を目指している。

これらを発展させ、地域と大学が連携した「縁結びプラットフォーム」を拠点として、「持続可能な共生社会」を実現

浜田、益田両市と共同研究が6件

両市が報告

島根県立大学は2007年5月に浜田市と、13年5月に益田市と、包括的な連携協力に関する協定を締結。人材育成や共同研究、

共同研究を講評する浜田市の久保田恵市市長(上)と益田市の山本浩章市長

協力を締結し、計6件の内容を報告した。

ラムでは両市との共同研究

プラットフォーム事業」として応募し、2013年度

ム」、地元自治体や企業・

〈浜田市との共同研究〉
商店街活性化に関する調査―3つの分析軸から見る中心市街地活性化―　久保田典男准教授(浜田キャンパス)
地元の食を再考する「まち弁」企画―浜田市のイカを活用して―　田中基子准教授(浜田キャンパス)
浜田市の商店街活性化を目指して―大学と地域の融合の場としての中心市街地再生計画―　藤原直砂教授(浜田キャンパス)
高齢者の介護予防のための検討会　酒元誠治教授(松江キャンパス)
災害時に利用可能な情報通信技術の調査とテレモンストレーション　金野和弘准教授(浜田キャンパス)
石見宗教におけるビジネス資産得にむけたモビリティ・マネジメントの提案　西藤真一講師(浜田キャンパス)

平成27年3月22日付け・山陰中央新報

生誕地の歌 八雲にささぐ

――京都の歌手・松田さん

来月 ゆかりの地 松江で披露

明治の文豪、小泉八雲（1850～1904年）が生まれたギリシャ・レフカダ島に伝わる歌が4月、松江市内で披露される。歌うのは八雲を敬愛する京都市在住の歌手松田美緒さん(35)。「レフカダに根付く歌を八雲にささげたい」。多様な価値を認め、日本と日本文化を愛した八雲に思いをはせ、ゆかりの地・松江で歌い上げる。

小泉八雲にまつわる歌を披露する予定の松田美緒さん（堀田貴由子さん撮影）

歌手を志していた松田さんは大学時代、ポルトガルの民族歌謡・ファドに魅了され現地で歌手になり、同国などで公演を重ね、2005年に日本でデビュー した。

一方、社会学者だった父の影響で幼少時から八雲の同国などで公演を重ね、2著書を愛読。「八雲は異文化体験をしたからこそ、日本文化や日本人の本質を捉えることができた」と今も心のより所になっている。

世界を巡って物語を再話した八雲の精神に感銘し、11年から小笠原諸島など離島やへき地を訪問。地元に伝わる14曲を収録したアルバムを14年12月に発売した。今年1月には、かねて切望していたレフカダ島を訪ね、現地住民から同島に伝わる歌を教わった。

松江でのコンサートは、八雲のひ孫の小泉凡さん(53)＝松江市在住＝の仲立ちで実現。レフカダ島の歌を披露するほか、凡さんと対談を行う。凡さんは「八雲と松田さんは価値観を共有している」と本番を心待ちにし、松田さんは「八雲の愛情の深さを歌に込めたい」とする。

コンサートは4月7日午後7時、松江市白潟本町の市民活動センターで開演。前売り3千円、当日3500円。問い合わせは、どこでもミュージアム研究所の高嶋敏展さん、電話090（3638）5700。

平成 27 年 3 月 24 日付け・山陰中央新報

「しまね三昧」リエット考案

松江で試食会 関係者、商品化へ太鼓判

県産食材使い仏の保存食 県立大短大生3人

県立大短期大学部（松江市浜乃木7丁目）の学生が県産食材を使ったペースト状の保存料理・リエットを考案し24日、関係者に振る舞った。島根和牛に地元産ショウガの葉を煮込んで肉質を柔らかくし、みそとサンショウで味付けした逸品。味わった関係者は「和洋問わず、何にでも合う」と商品化に向け太鼓判を押した。

「しまね三味リエット」を使った料理を紹介する学生

リエットは、肉にラードなどを混ぜて煮込んだフランスの保存食。家庭料理に欠かせない一品として親しまれている。

考案したのは健康栄養学科2年の朝鍋けいとさん(20)ら3人。籠橋有紀子准教授(43)＝栄養学＝の下で、農畜産品の生産者や加工業者への聞き取りを重ねてニーズを把握し、卒業研究の一環として開発を思い立った。

理想の味を追い求めて8カ月を費やし「しまね三味リエット」と命名。島根和牛に、出雲市斐川町産で未利用部分のショウガの葉を加えて煮込み、松江市西長江町産のみそと、雲南市産のサンショウで味付けした。

この日、松江市西川津町のレストランカフェ・メリメロで開かれた試食会では、学生と料理人が考えた9品を用意。パンの上にジャコと玉ネギ、リエットをのせた「和風カナッペ」や、リエットを塗った焼きおにぎりを県やJA関係者40人に振る舞った。

試食したJAしまね雲南地区本部企画総務部ふれあい課の横山文訓係長(37)は「おいしかった。学生が生産者や販売者の声に耳を傾けてくれたのがうれしい」と喜び、朝鍋さんは「地域を代表する商品にしたい」と笑顔を見せた。

リエットは今秋、農業生産法人いずも八山椒（雲南市木次町東日登）で製造、販売される予定。

平成 27 年 3 月 25 日付け・山陰中央新報

八雲に年賀状届けたよ

松江・川津小 松本君の作品

凡さんが墓前で朗読

八雲の墓前で、松本匠平君が書いた年賀状を読む小泉凡さん（ＮＰＯ法人松江サードプレイス研究会提供）

松江市ゆかりの文豪・小泉八雲（1850～1904年）に宛てた年賀状募集で、最高賞の「へるんさん特別賞」に選ばれた同市立川津小学校4年の松本匠平君(10)＝写真＝の作品を、八雲のひ孫の小泉凡さん(53)がこのほど、東京にある八雲の墓前で朗読した。

年賀状募集は、ＮＰＯ法人松江サードプレイス研究会が、2013年から取り組む「〝手紙を書こう〟キャンペーン」の一環で実施。市内の川津、乃木両小児童から159通が寄せられた。

松本君の作品は、八雲の怪談を「すごくこわーいです」と記したほか、「これからも天国で話を作ってください」などと八雲に語り掛けるようにつづり、「耳なし芳一」の絵も添えている。八雲作品に親しんでいる様子が伝わる、と高く評価された。

墓前での朗読は最高賞の〝特典〟で、凡さんがＮＰＯメンバーと、松江から東京都豊島区の都立雑司ケ谷霊園に出向き、八雲が眠る墓の前で読み上げた。

自作が朗読されたことを聞いた松本君は「八雲さんの話が好きな自分の気持ちが伝わったと思う」と喜んだ。

平成 27 年 3 月 31 日付け・山陰中央新報